

「ブリティッシュ・コロンビア大学の 地域貢献とサービス・ラーニング」が開催されました

実施報告

日時: 2010年11月29日(月) 17:15 ~ 18:30

場所: 東海大学湘南キャンパス 8号館4階 8-402教室

司会: 尾崎 由佳(チャレンジセンター専任講師)

内容:

1. ブリティッシュ・コロンビア大学の地域貢献とサービス・ラーニング
(崔 一英(チャレンジセンター教授))
2. 質疑応答
3. ディスカッション



1. ブリティッシュ・コロンビア大学の地域貢献とサービス・ラーニング

崔 一英(チャレンジセンター教授)

カナダは国家レベルでの移民支援を行っており、国内に多数の移民が暮らす多文化共生社会である。国民の間には社会主義的理念や助け合い精神が浸透し、ボランティアの先進国と呼ばれる。社会から受けた恩は社会に還元するという思想が広く受け入れられており、15歳以上の25%がボランティア活動に従事するなど、日常生活において当たり前のように社会貢献が実践されている。

ブリティッシュ・コロンビア大学(以下UBC)では、一般市民に大学施設を開放して様々なイベントを開催している。また、貧困地域に拠点を置いた UBC Learning Exchange と呼ばれるオフィスで市民講座を開くことを通じて、地域活性化を目指すとともに、学生が地域理解を深める機会として役立てている。たとえば、サイエンス学部が主催する無料講座では、コーディネーター・メンター2人・アシスタント学生が指導にあたり、無料の文具や食事券などのサービスも含む手厚い教育を行っている。講義資料や簡易実験は念入りに準備されたものであり、講義スキルも非常に高いことから、教員たちが熱意をもって取り組んでいることがうかがわれる。



UBCのコミュニティサービス・ラーニングは、Community Learning Initiative (CLI) という2006年に創立された組織が中心となって行っている。総額250万カナダドル(5年間)の予算を持ち、1800名(全学生の5%)の参加学生数を目標として活動している。2008年度には1675名の参加があった。参加学生には、1セメスターあたり39時間の活動をすることによって3単位が与えられる。教育補助・農業・エンジニアリングなど幅広い分野にわたる40の団体が参加し、学生を受け入れている。この活動の成果としては、学生の高い満足度や、地域理解への貢献、地域活性化、学生の責任感・実行力・勉学意欲の向上などがあげられる。

2. 質疑応答

- Q GLIには専属の教員や職員がいるのか？
- A 教員は学部学科の所属だが、職員はGLI専属であり人数もかなり多い。予算が豊富にあることがそれを可能にしていると思う。
- Q 市民講座の学生アシスタントは無給ボランティアなのか？
- A 完全無給のようだ。
- Q 活動分野は、地域団体の要請を受けて決定しているのか、それとも大学側が選択しているのか？
- A どちらの場合もあると思う。
- Q 学生のレベルは地域のニーズに合っているか。地域の問題解決に役立っているのか？
- A 学生だけの力で問題解決をさせるのは難しいかもしれないが、教員や職員のサポートによって解決を実現させている。地域住民の側も、学生に対してさほど高度なレベルを要求しているわけではなく、「大学生がやっていることだから」と温かい目で見守っているようだ。
- Q 参加学生は低学年が多いのか？
- A 割合はわからないが、高学年や大学院生も多数参加している。
- Q 研修はどのような内容か？
- A 派遣される学生を対象に、派遣先の団体やその活動を理解するための研修を行っている。また指導する教員に対する研修もある。

3. ディスカッション

【テーマ】チャレンジセンターの活動にどう生かすか？

- ・UBCの取り組みは、チャレンジセンターの社会貢献系プロジェクト(援農や障害者自立支援)の参考になると思う。
- ・奉仕精神が浸透しているカナダ人学生とは異なり、日本人学生の場合はどうやってモチベーションを高めるかというところから考え始めねばならないところが難しい。また、地域社会としても、日本ではボランティア活動を受け入れる姿勢が整っているとは言えない。このような文化差を考えると、UBCの取り組み方をそのまま日本に持ち込むことは困難ではないかと思われる。
- ・まずは、地域にも大学にもメリットがあるようなwin-winの関係を作っていくことがカギとなるだろう。たとえば雪かきプロジェクトはそのような関係を築きつつあるのではないか。
- ・自発的にボランティア活動に参加したいという若者を育てるためには、幼少期から、自発的に何ができるかを考え、実行し、成功経験を得るといった繰り返しをさせることが重要だろう。

- ・予算規模で言うなら CLI もチャレンジセンターもほぼ同等と言える。また、チャレンジセンターにおいても、サービス・ラーニングの要素を組み込めるプロジェクトがすでに活動している。今後、CLI のような活動の仕方を取り入れていくことは可能ではないか。
- ・UBC ではサービス・ラーニングに参加することによって単位を取得できるそうだが、単位取得だけが学生のインセンティブになっているわけではないと思う。たとえば、チャレンジセンターにおいてボランティア活動に参加したことを証明できるようなシステムがあれば、就職活動時などに役立てることもでき、学生のインセンティブになるのではないか
- ・研修や振り返りを通じて学生が学びの効果を実感できれば、その後のボランティア活動への参加意欲を高めるとともに、奉仕精神そのものを育成することにつながるだろう。